雨の中の光

玖月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨の中の光

【Ｎコード】

Ｎ５２６０Ｚ

【作者名】

玖月

【あらすじ】

神楽も新八も出掛けてしまったある雨の日。松光は雨音を聞きながら、妹になることの無かった少女に思いを馳せる…。

梨栖さんとのコラボ話です。梨栖さんのお許しは頂いております。

ごあいさつ

先週土曜日の１２月１０日は、梨栖さん家のオリジナルキャラ須藤恋歌さんのお誕生日でした！　お誕生日お祝い話にとコラボ話を書かせていただいたんですが…。

一週間以上過ぎてて遅い！　（┐；）！！

し、

長い！　Σ（┐）！

し、

主役のはずの恋歌がちっとも出て来ない！　（┐；）！！

という、実際このお話の主役は恋歌でなく、梨栖さんのオリキャラの一人「出浦時雨」となっているお誕生日お祝いでも何でもない、私が松光と時雨を出会わせたかっただけの欲望の塊となっております。

そんなお話を投稿するのを、梨栖さんは快く許して下さいました…。本当に心の広い方や…。（つД、）

以下、時雨が大活躍する梨栖さんの作品です！

「銀魂～美しき蜘蛛の巣にかかりて～」
ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ０５３１ｑ／

「銀魂～美しき蜘蛛に睨まれて～」
ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ６４５６ｖ／

とても素敵なのでぜひ読んでみて下さい！
読まないと松光がたたっ斬っちゃうぞ！　Ψ（｀◇´）Ψ

金髪の少女（前書き）

松光が昔に思いを馳せるシーンから始まります。
メインの時間軸としては、梨栖さんの作品「銀魂　～美しき蜘蛛の巣にかかりて～」の過去篇、
「～親子は血でなく心で繋がる」
と
「～事のきっかけは思いもよらない理由だったりする」
の途中のお話になります。

金髪の少女

しとしとと雨が降る。

折角の休日なのにと若干残念そうだった神楽は、それでも李麻と遊んでくると言って傘を片手に出かけて行った。

新八は例のごとくアイドルのコンサートに、

銀時は髪がハネるとソファーでふて寝してしまっている。

定春も散歩に行けないためかリビングの端っこで丸くなり、誰も構ってくれない暇を弄んで、

松光は玄関を出て1階に繋がる階段に腰掛けていた。

屋根があるため、傘が無くても濡れやしない。

ぴちゃ…と屋根から滴が落ちる音を、ただぼうっと聞いていた。

「…」

時折、雨の日に思い出すものがある。

まだ幼い銀時が、吉田家にやってきてから数ヶ月しか経っていなかった頃のこと。

父松陽が小太郎や晋助、銀時を保護したように、松光もまた子どもを保護したことがあった。

「…時雨」

松光の妹になることのなかった彼女はいま、どうしているのだろう…。

あの日も、雨が降っていた。

まだ１５だった松光は、松陽や子どもたちが授業をしている間は家事をしていて、その日も下町へ買い出しに出ていた。

天気予報では降らないと言っていたのに、帰り道で土砂降りの雨に襲われ、具材を濡らさぬよう胸に抱えて、ぬかるんだ森の中を進んでいた。

下町へ行くにはこの森を通らなければいけない。

道が入り組んでいる上に、松光たちが住む村とは別の場所へ向かう道は、斜面も多くて時折怪我人が出る。

自分も転ばないようにしないとなと気をつけて走っていたら、

数メートル先の地面に金色の糸が広がっているのを見つける。

首を傾げて何だろうと歩み寄ってみて、松光は飛び上がった。

「なっ…！」

それは金色の糸ではなかった。

力無く地面に横たわり、気を失っている少女の、美しい金髪だった。

「なっ…」

何があったのだろう。

言葉も出ず、とにかく生きているのかとそっと首筋に触れる。

雨に打たれて冷えている肌の下で、弱々しくはあるが鼓動はしっかりと伝わってきた。

どうすればいい？

考えているヒマなどない。

松光は上着から袖を抜くと少女にかけ、彼女が極力濡れないように抱き上げた。

そしてそのまま、出来る限りの早足で村へ向かう。

「…さ」

少女が何事かを言った。

何だろうと足を止めずに耳を澄ませてみたら、少女の閉じられた瞳から涙が流れているのが見て取れた。

「…おかあさん…」

松光は確かに、その呟きを聞いた。

自宅に少女をつれて帰り、ことのあらましを松陽へ伝えた。

少女の着替えと手当ては、近所のおばさんにしてもらった。

幼いと言えど少女、気にすると思ったからだ。

少女は全身に細かい傷を負っており、特に左手首と右足首の捻挫が酷い。

今は怪我による発熱のため寝込んでいるが、手当てをしてくれた隣のおばさん曰く、年頃の娘にしては妙に痩せすぎているとのことだった。

背格好からして、年齢は松光の弟たちと同じくらいだ。

しかしそれにしてはやせっぽっちだと、隣のおばさんは訝しがっていた。

もしかしたら、虐待にでもあってたんじゃないかねぇ…。

そんなことを言って帰って行ったおばさんを思い出しながら、少女を寝かせている部屋へ水を張った桶を持っていく。

布団に寝かされた少女は熱に魘され、荒い息を繰り返していた。

桶で濡らした手ぬぐいを固く絞って額にのせてやると、ほんの少し

だけ辛そうな表情が和らいだのが分かる。

こんな幼い少女が、何故あんなところで一人でいたのだろう。

あの道は街灯もないため、夜になれば恐ろしく暗くなる。

季節によっては狼も出る。

晋助も松陽と出会う直前に狼に遭遇し、松陽に助けられたこともあるぐらいだ。

この村に来たかったのか、

はたまた、あの森を通って街に出るつもりだったのだろうか。

どちらにしろ、幼子一人では危なすぎる。

「…？」

枕元におかれた彼女の私物と思わしきものに視線が止まる。

一枚の紙切れと、手紙一通。

好奇心に負けて紙切れを見てみれば、それはある場所を示した地図だった。

この村から、大人なら数日で行ける距離の場所。

松光も名前ぐらいなら知っている場所だった。

こんな遠くにいくつもりだったのだろうか。

たった一人で？

「う…」

少女が小さく呻き、松光は慌てて地図を元の位置に戻し、少女の顔色を伺う。

額との温度差が出来たためか汗がにじんでいて、やはり苦しそうな息遣いは収まらない。

額にのせていた手ぬぐいで汗を拭いてやっていると、少女の口がカサカサと動いた。

「…ぁ」

何か言っている。

聞き取ろうと耳を寄せてみたが、もう少女は何も言わず…。

しばらく様子を見ようと立ち上がった時だった。

「…おかあさ…お母さん…」

つうっと溢れた涙が枕に吸い込まれる。

「…」

悪い夢を見ているのだろうか、

これは起こしてやるべきなのだろうか。

先ほど彼女を助けてから2回も聞いた「お母さん」という言葉。

少女があんなところにいたのも、その「お母さん」が関わっているのか…。

「…」

どうすればいいか迷っていると、玄関のほうから物音がすることに気づく。

廊下へ出れば、松陽が玄関で草履を脱いでいるところだった。

「どうだった？」

「下町で迷子はいないらしい。下町の子じゃないのかな…」

少女の親が娘を探していたら大変だと、松陽が下町に連絡に行ってくれていた。

少女は迷子札も持っておらず、身元を確認できる物も何もないため、

近くの町村に住んでいるのか遠方から来たのか、分からない。

「…親が見つかるまで、しばらく置いてやっていいよな」

「もちろんだよ。あんな大怪我をしている女の子を放り出すなんて、出来ないからね」

ほっと息をつく松光の横を過ぎ、松陽は廊下を進む。

そっと少女が寝ている部屋を覗く父親の背に、松光はぶっきらぼうな声を投げた。

「親父が、小太郎たちを拾ってきた理由がよく分かったよ」

満足な生活をさせてやれないからもう拾ってくるなと言ったのは松光だ。

言った松光が、今回あの少女を拾ってきた。

だが、あんな森のなか倒れている少女を見捨てることがどうして出来よう。

結局この親子は、困っている者を見過ごすことが出来ない性分なのだ。

「拾うなんて言葉は悪いな。保護したにしなきゃ」

お前が優しい息子でよかったよ。

松陽はそう言って松光の頭を撫でて、廊下を進んでいった。

翌朝になっても、松光が保護した少女は目を覚まさなかった。

松光は一晩中傍にいたものの、少女の容態は変わることなく…。

やはり譫言で、「お母さん…」と繰り返し口にしていた。

「あの女の子、大丈夫かなぁ…？」

朝食作りを手伝ってくれていた小太郎がぼんやりと呟き、松光は少しばかり眠気を訴える頭を振った。

松光が慌てて抱えてきた少女を、みな心配してくれていたのだ。

「熱も少しずつ下がってきてるし、大丈夫だよ。今日には目を覚ますさ」

「起きたら、仲良くなれる？」

「なれるさ。小太郎は優しいからな」

そう言って頭を撫でてやったら、それはそれは嬉しそうにきゃっ…と笑うものだから、

可愛らしい笑顔が寝不足の頭にクリーンヒットして、倒れそうになった。

熱は下がったものの、少女は昼を過ぎても目を覚まさず…。

家事を終え、昼休みに5人分の昼食を作ったあとでは流石に睡魔が襲ってきて、

少女の傍らでぐらぐらと舟を漕いでいた。

父も弟たちも授業中で、辺りは静かでより眠くなってしまう。

眠い眠いと頭で繰り返していたらもぞもぞと衣擦れの音がしてハッと顔を上げると、少女がぼんやりと薄目を開けていた。

「起きたか？」

安心して覗き込んだ松光に返ってきたのは、言葉ではなく…。

「がっ…！」

左足での見事な回し蹴り。

蹴りと言うよりかはただ振り回した足が直撃しただけなのだが、ヒ

ットした顎がぼかんと音をたて、ついでに松光の歯もカツンと鳴り合い…。

一瞬意識が飛びかけたが、なんとか耐えた。

痛みを訴える顎に手をあてながら見やれば、少女は無理やり体を起こそうとしていて…。

「馬鹿！　動くな！」

松光がそう叫んだ途端、少女は全身を走る痛みに顔をしかめてうずくまる。

松光は心配して、少女に手を伸ばした。

「ほら、だから言っ…」

「近寄らないで！！」

松光の手がぴたりと止まった。

少女が叫んだ声はとても必死で、ともすれば悲鳴とも呼べるものだった。

少なくとも、こんな幼気な少女が発するものではなかった。

「…悪い。近寄らないから、ホラ。…な？」

どうどうと彼女を宥め、その意志を見せるために布団から数歩離れる。

少女はひとまず安心してくれたのか、布団の上で大きな息をついた。

辛そうな息づかいだった。

「大丈夫か？」

「…ここ、どこ？」

「俺の家だ。お前、森の中で傷だらけで倒れてたんだ」

覚えてるか？　そう聞いたら、少女は何かを思い出したようにハッ

と顔を上げた。

「い、行かなきゃ…」

慌てて周りを確認し、枕元に置かれていた手紙と紙切れを掴む。

そして立ち上がろうとするものだから、松光のほうが慌てた。

「オイ、馬鹿…！」

「きゃ…！」

ついた右足に激痛が走ったのだろう。

痛みに顔をしかめて崩れ落ちるものだから、松光は慌てたまま少女へ駆け寄る。

床に倒れてしまいそうな少女の細い肩を支えるものの、少女は松光から逃れようと身をよじる。

「手足ねんざしてんだ。大人しく養生してろ」

「私こんな所で止まってる場合じゃないの！　今すぐ行きたい所があるの！」

「こんな怪我で行けるか！　治るまで養生していけ！」

「いや！」

「いやじゃない！」

暴れる少女を宥めようと押さえるが、少女は必死に松光を押しのけようとする。

何故そこまで行きたがるのか、松光には分からない。

「おや、目が覚めたんですね」

呑気な声がして、少女はぴたりと動きを止めた。

顎を押しのけられて上を向いていた松光も、横目で声をしたほうを見やる。

案の定、入り口には松陽がのんきに笑っていた。

「傷だらけだったので、驚きましたよ。具合はどうですか？」

「…もう、平気…」

「そうですか、それは良かった…。足の怪我が酷いので、しばらく休んでましょうね」

松陽の笑顔に少女も毒気を抜かれたのだろう。

松光を押しやっていた手から力が抜け、「はい…」と小さく呟きが漏れた。

教師をしているだけあって、松陽は子どもの扱いに長けている。

この点では、松光はまったく適わない。

「私はここで塾講師をしている吉田松陽といいます。彼は私の息子

の、松光。貴女のお名前は？」

ぐっと詰まった少女が、そのまま俯いた。

吉田父子はしばらく待ったが、少女は口を開こうとしなかった。

「…言いたくなければ、それでいいですよ」

松陽が柔らかく言い、少女はおずおずと顔を上げた。

「お腹がすいたでしょう。いまお粥を作ってきますね」

そう言って立ち上がった松陽の足を、松光が慌てて掴んだ。

「？　なんだい松光」

「作るって親父が作る気か！」

「そうだよ」

「さらりと言うな！　親父が料理なんかしたら厨房が全壊の上に折角起きたコイツが倒れるぞ！」

失礼だなぁと眉を寄せる父親を無理やり座らせ、松光は変わりに立ち上がる。

「俺が作るから余計なことすんな」

「今回は上手く作れそうな気がするのに…」

「頼むから気がするで厨房に立たないでくれ…」

いいから親父も待ってろと言い残し、松光は部屋を出た。

そしてやっと目覚めた少女を思い出した。

弟たちと近い年のように見えるのに、妙に大人びているのは、

そして表情が乏しいと思ったのは、

松光の気のせいなのだろうか…。

続く

金髪の少女（後書き）

時雨が起き様に松光を蹴り飛ばしたシーンは、時雨が銀さんたちに初めて出会った時に銀さんの喉笛を蹴り飛ばしたシーンのパロディでした。誰かに殴られてカツンと歯が鳴るシーンを書くのが、私は好きみたいです。（笑）

無くした簪

厨房で鍋をくつくつ言わせていると、外から激しい雨音が聞こえてきた。

また雨かと憂鬱になっていたら、お粥は出来たかい？　と松陽が入ってくる。

「あいつは？」

「少し一人になりたいそうだ。まだ警戒はしていたけど、ぽつぽつ話してくれたよ」

松陽が聞き出したところによると、少女の年齢は９歳で、森を抜けた先にある街に行きたかったそうだ。

雨の中ぬかるんだ森の道を進んでいたら、足を取られて斜面を転げ落ちたらしい。

「一人で行こうとしたのか？　服部忍者学校に」

そんなことを言ったら、知っていたのかいと目を丸くされた。

「枕元にあった地図だけ見せてもらった。俺も名前ぐらい知ってる」

「うん…、これはあくまで…あくまで僕の想像でしかないけれど…。彼女の両親は、もう亡くなってしまったんじゃないかな。服部くんのところは身よりのない子どもを引き取っているというし、もしかしたら彼女の両親が、残していく娘を託すために向かわせたのかも…」

「…一理あるな」

服部くんという単語を気にかけつつ、同意する。

「彼女はどうしてもそこに行くというし、怪我が回復するまでここにいさせてあげよう」

「ああ。それがいい」

煮立ったお粥をかき混ぜていると、ただね…と松陽の溜め息混じりの声。

「彼女、男性が嫌いなんだそうだ」

「いやそれヤバくね！？」

ここは男所帯だぞと、松光は目を剥いた。

はいるぞーと声をかけて襖を開けると、少女は布団にへたり込んでぼんやりと雨の降る外を見ていた。

鍋の乗ったお盆を持つ松光に気付き、少しだけ顔を強ばらせる。

「悪かったな、遅くなって」

「別に…」

来なくても良かったのにとでも言いたげに、ふいっとそっぽを向いてしまう少女の傍らに、松光はお盆を置いた。

蓋を開けてやれば、湯気がふわりと上がっていく。

一緒に持ってきていた湯飲みに茶を淹れていると、少女がぼんやり呟いた。

「本当にあなたが作ったの？」

「ああ、親父に作らせるととんでもないものが出来上がるからな。美味そうか？」

「まずそう」

遠慮なく言われ、松光はガツンと殴られた気分になった。

「すんません…」

幼子に律儀に謝って、小皿に粥をよそってやる。

「少しでいいから胃にいれておけ。もう何日も食ってないんだろう？」

小皿とレンゲを渡しても、少女は訝しそうにそれを見下ろすだけだ。

食べる気はないのだろうか。

扱いにくさでは銀時に匹敵するなと小さく息をついて、外を眺めやる。

バケツをひっくり返したような大雨が、ひっきりなしに降り続けていた。

「…すげぇ雨だな」

「…」

少女は何も言わない。

レンゲを握った手も動かさない。

食欲がないのか、はたまた男の松光が作ったものを口にしたくないのか…。

「…」

彼女の右手がやっと動いて、レンゲが白い粥を掬った。

少し前屈みになった少女の髪が一房、前へ下がり…。

「…！」

少女の右手が止まった。

「あっ…！」

慌てて辺りを見回すので、松光は驚いて目を瞬かせる。

「…どうした？」

「私、箸してなかった！？」

「簪？」

助けた時の彼女を思い出す。

彼女の髪は地面に広がっていて、雨に濡れていた…。

あの場所に落としだのだろうか。

「して…なかったな」

少女は信じられぬように首を細かく振り、小皿を取り落とした。

少量の粥が、床にこぼれた。

「いっ、行かなきゃ…！」

髪を押さえて慌てて立ち上がろうとするものだから、松光は慌てて

その肩を掴む。

「待て！　そんな怪我で動くなって！」

「そんなこと言ってられないの！　あの簪は、命より大事なものなんだから！」

「お前の命も大事だろうが！」

そう言っても、少女は松光の手を振り払う。

ばしっと音がして、松光の手が少女の肩から離れた。

「私の命なんかどうでもいいの！」

松光の頭の中でぷちっと音がした。

それが血管が切れた音だと気付く前に、松光は少女の両肩を掴んで怒鳴っていた。

「いい加減にしろ！！」

松光の大きな声に、少女はびくりと身を強ばらせる。

「お前が無くした簪が、どれだけ大事なものなんかは知らない！だがな、少なくともお前の母親が、手足怪我した娘に無理をさせるためにお前を使いに出したわけじゃないことぐらい分かる！」

少女は一気にまくし立てる松光に硬直し、唖然としたまま松光を見つめていた。

その瞳にじわりと涙が溜まり、美しいサファイアのような蒼い瞳が滲む。

「…ごめんなさい…」

白い頬に涙が伝い、俯く少女に松光もやっと我に返る。

「俺も悪かった。デカい声出して…」

こんなに心底怒鳴ったのなど久しぶりだ。

大事な簪を無くしてしまった故か、松光に怒鳴られた故か、ぽろぽろと涙を流す少女の小さな頭にぽすっと手を置く。

「俺が探してきてやるから、安心しろ」

「…でも」

「これでも探し物は得意だ。必ず見つけて来てやる、約束だ」

小指を立てると、力を入れればいともたやすく折れそうな指がそろそろと絡みつく。

「転げ落ちた場所で無くしたことは、間違いないんだな」

すん…と鼻をすすって頷く少女にそうかと苦笑し、松光は指をといた。

「そうと決まれば善は急げだ、簪の特徴を教えてくれ。形はどんなだ？　こんなのか？」

暑い日や、机に向かって作業する時などに使う簪を懐から出して見せる。

これ一本で松光の長い髪を纏められるため、かなり丈夫な代物だ。

「ここが黒いの。それから、ひし形の飾りがついてる…」

簪の頭についている玉飾りを指差し、少女はか細い声でそう言う。

松光は分かったと小さく頷いて、立ち上がった。

「じゃあ、行ってくるな」

少女は心配そうな目で松光を見上げてくる。

今にも泣きそうな深い海の色の瞳を綺麗だと思いつつ、そっと小さな頭を撫でる。

「安心しろ。約束は守る」

粥でも食って待ってろと言い残し、松光は廊下に出た。

外からは、大きな雨の音が響いていた。

「あ”〜、冷てェ！」

意気込んで飛び出したものの、横殴りの雨は松光の体温を奪っていく。

少女が倒れていたあたりの斜面をくまなく探したが、簪らしきものは見当たらない。

「参ったな…」

このままでは少女に合わせる顔がない。

困り果てた、その時…。

ぶわっ！

「わっ！」

強風が吹いて、傘の骨がばきりと音を立てて反対方向に折れた。

ついでこともあろうか貼り付けてある布も全部吹っ飛ばされてしまい、松光の手には折れた骨だけになった傘だけが残った。

「…参った」

冷たい雨が頬を叩き、髪を濡らしていく。

手に残った傘を見やり、もう役に立たないものを持っていても仕方ないと思い…。

邪魔だったので折れた骨を畳んで、近くの枝へかけておく。

あとでちゃんと回収しよう。

ずる…。

「わっ！」

ぬかるんだ地面に足を取られ、斜面を滑り落ちてしまう。

派手に打った尻をさすりながら、少女もこうして転げ落ちてしまったんだろうなとぼんやり思った。

落ちた斜面から流れる濁流が大きな水たまりを作り、更に下の斜面へ流れていく。

この下は小さな崖のように切り立っており、ここから落ちればひとたまりもない。

「…あ」

何も転げ落ちたのは少女だけではないはずだ。

簪も一緒に落ち、もしかしたらこの濁流に流されて…。

「…」

ひょいと崖を覗いてみた。

流れる濁流が小さな滝のように落ち、下には森と、小さな村が見える。

「…あっ！」

小さな岩場に、きらりと光るもの。

「あった！」

まるで子どものような声を上げた。

あれは間違いなく少女の簪だ。

岩場に手をかけ、ゆっくりと降りて簪に手を伸ばす。

しっかりと手に取った簪は、少女が教えてくれた特徴と一致する。

あって良かった。

「よっしゃ…」

あいつ喜ぶぞと、崖を登り始めた。

時折上から落ちてくる大きな水玉が顔を叩き、足場も滑るためなかなか登れない。

それでもゆっくり登って、飛び出ていた岩に手をかけた時…。

ガラッ…！

「のあっ…！？」

手をかけた岩場が崩れ、松光は間抜けた声を上げた。

夕飯の時間が近づいても、松光が帰って来ない。

少女が無くした簪を探しに行ってくれたと教えてくれたが、それにしては遅すぎる。

もう夕飯の時間だ。

窓を叩く雨は力を弱めるどころかずっと力を増していて、まさか何かあったのかと心配していたら玄関に見知った気配を感じた。

慌てて玄関へ急ぐと、松光が軒下で長い髪に吸われた水を絞っているところだった。

「たでーま」

ぶっきらぼうに返してきた松光は、この寒い時期に水泳でもしたのではないかというほどずぶ濡れで…。

水を吸った重い髪をしきりにかきあげていた。

「びしょ濡れじゃないか。大丈夫かい？」

「大したこたぁねーよ。これアイツに渡しておいてくれ」

こちらも水を吸って絞られた手ぬぐいの上に、ぽつんと漆黒の玉簪が一つ。

松陽が自分の手ぬぐいを取り出し、その簪をそっと乗せると…。

松光は満足そうに笑って、廊下を進んで行った。

「飯の前に風呂入る。足袋の中までびしょ濡れだ」

水の染み渡る足袋のままぺったらぺったら。

松陽が見送る息子の元に、その弟たちが群がってきたのはその時だ。

「兄貴おかえりー！」

「おかえりー！」

「ただいま。悪いが夕飯の支度たの…こら小太郎、近寄るな汚れちまうぞ」

雨水の滴った横顔が、松陽にも見えた。

その顔は本当に嬉しそうで、兄バカめ…と苦笑が漏れる。

肩を揺らして笑っていた松陽は、それどころではないと気付き踵を返す。

この簪を、早く少女に届けなければ…。

あーさっぱりしたと風呂からあがると、廊下に松陽とあの少女が出てきていた。

少女はひょこひょことびっこを引いていたが、歩けるようにはなったらしい。

「起きられるようになったな。無理すんなよ」

笑顔でそう伝えたら、少女は気まずそうに松陽の影に隠れてしまった。

松陽が、柔らかく微笑んだ。

「…簪、ありがとう…」

ひょこりと目だけを覗かせて、小さな声で少女が言う。

わざわざそれを言うために出てきてくれたのだろうか。

松光は嬉しくて、どういたしましてと笑った。

「折角だからみんなでお夕飯をと思ってね」

「そうだな、腹減ったし…。な、そろそろ名前教えてくれねぇか。名なしじゃ呼べねーし、紹介もできねーし…」

「…」

少女は黙り込んで、目を伏せてしまう。

松陽が微笑んで少女の頭に手を乗せても、少女は浮かない顔のまま俯いてしまった。

「…ごめんなさい、言えない…。好きに呼んで」

松陽が困ったような笑みを浮かべて松光と顔を合わせ、松光は肩をすくめて膝を折った。

「じゃあ、…しずく」

少女がきょとんとして顔を上げた。

松陽も不思議そうに首を傾げた。

「俺はお前をそう呼ぶ。それでいいか？」

少女はしばらく黙り込んで、松光を見つめて、やがて…。

「…それでいい」

松光が嬉しそうににっこり笑うのと、奥からとたとたと晋助が駈けてきたのはほぼ同時。

「兄貴、風呂出たかー！？」

「ああ出たよ。夕飯の支度ありがとうな」

よしよしと晋助の頭を撫でてやれば、晋助は嬉しそうにニーッと笑う。

そして松陽の影に隠れる少女に気付き、あっと声を上げた。

「お前やっと起きられたんだな」

少女の目がすがめられたのを見たのは松光のみ。

松陽が笑って、しずくと言うんですよと銀時に紹介した。

「俺、高杉晋助。よろしくな」

晋助はそう言って手を差し出したものの、少女は少しだけ目を細め…。

「…ちっさい」

それだけを言った。

「ち、小さいっていうな！」

カッと顔を赤くした晋助が怒鳴る。

松光は父と顔を見合わせて、

また肩をすくめて見せた。

松光によって「しずく」と名を与えられた少女は、

本当に男が嫌いらしい…。

続く

ひとしずく

しずく、しずく
雨と涙のひとしずく。

「兄さん、なんでしずくはあんなに非道いこと言うの！」

翌朝、朝食作りを手伝ってくれていた小太郎が、ぷんぷん怒りながら訴えた。

昨夜、夕食の時間に紹介された少女しずくは、特別誰かと仲良くなるふうでもなく、むしろ小太郎や銀時に毒舌を吐きまくった。

小太郎には「女男」。銀時には「ホコリ」。

どうしてそうもポンポン毒舌が出てくるのかと思うほどの達者な口振りで、晋助たちをどん底におとしめていた。

「男が苦手なんだとさ。許してやってくれ」

外ではまだ雨が降り続き、強風と雨水がばたばたと窓を叩く。

その音を聞きながら松光がそう言っても、小太郎は気が済んでいないようだった。

「それにしたって、しずくは…」

「私がなに？」

声がして振り向くと、寝起きのしずくが目をこすって厨房の入り口

に立っていた。

「おはよう、しずく」

松光が笑顔で声をかければ、しずくは小さくおはようと返してくれた。

小太郎はムッとして、頬を膨らませる。

「お前が非道いことを言うから許せないって兄さんに話してたんだ！」

「許してもらいたくもないわよ女男のヅラさん」

「ヅラじゃない桂だー！！！　それから女男は止めろ僕は男だ！」

「あらごめんなさい。女の子みたいな顔してるから間違えたわ」

投げつけられる毒舌に赤くなってぷるぷる震えていた小太郎に失礼ながら苦笑して、よしよしと小太郎を宥めながら松光は膝を折る。

「なぁしずく、昼は親父の塾で勉強してみないか？」

「…じゅく？」

「ああ、女の子もいっぱいいるし…。母屋（こっち）で俺と二人きりは嫌だろ？」

「うん」

即答され、松光はまたガツンと殴られた気分になった。

「じゃあ、そうしようか…」

多少ダメージをくらいつつも立ち上がる。

小太郎はまだ赤い顔で、ぷるぷると震えていた。

１時間目が終わって、休み時間。

気になって教室をのぞくと、児童たちから「兄ちゃんだ兄ちゃんだ」と群がられた。

ちょっと待っててなと児童たちを宥め、手洗いに出ていた銀時を呼び止める。

「銀時、しずくはどんな様子だ？」

銀時はまた居眠りをしていたのか、しょぼつく目を擦りながら「んぁ～…」と呟いた。

「お前また居眠りぶっこいてたのか…」

「雨の音で眠れなかったんだ…」

嘘こけと松光に言われて、嘘じゃねーもんとバレバレの反論をする銀時。

「しずくなら流加と楽しそうに喋ってたぞ…」

銀時と二人で教室を覗き込めば、しずくは数人の女子を含めた流加たちと楽しそうにおしゃべりをしていた。

松光や銀時たちといるときよりも、柔らかい表情をしている。

「流加は男だろ…。あいつ男が嫌いなんじゃなかったのかよ…」

眠そうな顔で、それでも不満げな銀時に苦笑し、流加はなつっこいからしずくも気を許したんだろうと頭を撫でてやった。

「2時間目は寝るなよ」

「えー」

「えー、じゃねェよ」

ぺしんと軽く銀時の頭を叩いておく。

しずくが笑えているようで、ほっとした。

深夜、彼女が使っている部屋の前を通った時にまた「お母さん…」と悲しそうな譫言を聞いたが…。

少しずつ笑えるようになってくれているなら、それでいい…。

その日の夕食後、松光は敷地内にある道場で一人、稽古をしていた。

既に大量の汗をかきつつ、真剣での素振りを止めようとしない。

未だ降り続く雨の音をかき消すように、真剣が振り上げられては唸りを上げて振り下ろされる。

どれくらいの間、そうしていたか…。

「ふう…」

真剣を下ろし、大きな息をついて額の汗を拭った時だった。

「松光」

透き通った声で呼ばれ、完全に集中していた松光は不意打ちを食らって跳ねた。

「うぉあ！？　あ、しずくか…」

小さな浴衣を着たしずくが、いつの間にか後ろにいた。

松光が集中し過ぎて気付かなかっただけか、

それとも彼女が足音も気配も消していたからか、

松光は考えたくなかった。

「どうした？　こんな所まで」

「…先生が、松光がテストの丸付けしてくれてるはずだからテスト用紙取りに行ってくれって。そしたら、松光が部屋にいなかったから…」

「わざわざ探してくれたのか？」

こくんと頷いてくれたしずくに、わざわざごめんなと謝罪。

「足、痛ぇだろうに」

「リハビリだと思えばいい。平気」

「そうか、ありがとうな」

しゃん…と鍔鳴りの音を響かせ、腰の鞘に真剣を仕舞う。

「しずく、言いにくいんだが…」

「なぁに？　丸付け終わってないなんて言わないでね」

「…ごめんなさい」

松光は素直に頭を下げた。

「だって稽古したかったんだもんよ～」

「言い訳しない。早くやんなさい」

「お前はお母さんか…」

廊下をてくてく進み、松光の部屋へ向かう。

しずくはまだひょこひょこと足を引きずっていたが、昨日よりは随分楽になっているようだ。

「…なんで稽古なんてするの？」

左腰にぶら下がる真剣をつつかれてそう問われ、「何でってなぁ…」と松光は頬をかく。

「強くなりてェからに、決まってるだろ」

「…強くなって、どうするの？」

「んなもん、護るんだよ。大事な人たちを」

しずくが、きょとんとしたまま隣をひょこひょこ歩く。

松光はそんなしずくに微笑んだ。

「強くなきゃ大事な人達は護れない。だから俺は強くなるんだ」

「強く…」

「ああ」

しずくの足が止まる。

先へ進んでしまう松光の背に、しずくは問い掛けた。

「…誰か、護れなかった人がいるの？」

松光の足が止まった。

松光はその質問には、答えなかった。

「…雨、やまないな」

ただそれだけを言って、また歩き出す。

しずくはそんな松光のあとを、ひょこひょことついていった。

強風と雨水が、ばたばたと雨戸を叩いていた。

彼女が松陽に届けてくれると言うので、急いで真剣を置いて準備にかかった。

しずくは警戒しているのか入り口に立ったまま入ってこず、仕方なく松光が入って来いよと声をかけた。

おずおずと入ってきたしずくを座布団に座らせ、寒くないようにどてらを羽織らせた。

「すぐ終わらせるから、待っててな」

そう声をかけ、すぐさま作業に取りかかる。

預かっていたテスト用紙に筆を滑らせていると、後方のしずくがぽつりと呟いた。

「松光の部屋、綺麗だね」

「おう、散らかすの嫌いなんだ」

振り返らずにそう答えたが…。

「でもこのどてら、クサい…」

これには流石に黙っていられず、ぐわっと振り向く。

「おい！　俺はまだ１５だぞ！　加齢臭なんかついてないかんな！」

「でもクサい…」

「はいはい、洗っておきますぅ…」

だんだん彼女の毒舌が、スキンシップの一つなんじゃないかと思えるようになってきた。

その証拠にクサいと言いながらしずくはどてらに埋もれたままだし、何よりクスクス小さく笑ってくれている。

「塾、どうだった？」

「楽しかった。勉強するの初めてだから…」

「そうか…」

勉強させてもらえなかったのか、

彼女の境遇が、まだいまいち分からない。

「…、あの女の人、誰？」

そんなことを言われて振り返る。

しずくの視線の先には沢山の写真立て。

その中の女性と言ったら…。

「ああ、俺の母さんだよ」

「…お母さん？」

「ああ…、俺が3つの時に、死んじまったけどな…」

しばらくの沈黙があった。

「母親」と「死」は、しずくにとっては禁句だったかもしれない。

俯いてしまったしずくに背を向け、作業を開始する。

「俺はガキだったからあんまり覚えてねぇけど…、とても強い女性(ひと)だったと、親父は教えてくれたよ」

「…」

「母さんは体が弱くてな。俺を身ごもった時も、体はとても出産には耐えきれないと言われたらしい。諦めるように言われたらしいが、それでも母さんは『産めないなら死ぬ』って言い張って、命をかけて俺を産んでくれた。幸い母体にも異常はなかったらしいが…。…母親ってのは強いよなぁ…」

ちらりとしずくを伺えば、しゅんと肩を落として小さくなってしまっている。

やはり「母親」の話は厳禁だったか、松光は少し反省した。

「松光が護れなかったのは、お母さん?」

思わぬ疑問が飛んで、思わず筆が止まった。

そうだ。自分がもっと強ければ、

母を護れたかもしれないのに…。

「…そうだよ。俺はもう誰も亡くしやしない。俺が強くなって、護るんだ」

「強く…」

「ああ」

「…どうすれば、強くなれる？」

振り向けば、しずくは至極真面目な顔をしていて…。

上質のサファイアの真っ直ぐな瞳に少したじろいだ。

「…鍛錬しかねぇと思う。俺にはよく、分かんねえ…」

「…そう」

俯くしずくが何を考えているのか分からず、松光は再び背を向けて作業にかかる。

しずくはもう何も言わず、ただ筆が紙を滑る音だけが室内に響き…。

「よし、終わったっ」

松光が声を上げた時には、沈黙が流れてから１５分が過ぎていた。

「しずく、終わっ…」

いつの間にかしずくは座布団に丸くなり、どてらに埋もれるようにして寝息を立てていた。

そろそろと覗き込むと、あどけない寝顔が綺麗な金髪の隙間から垣間見えた。

昨日までの思いつめたような寝顔ではなく、

子どもらしい、可愛らしい寝顔だった。

悪戯紛れに柔らかな頬をぷにぷにとつついて、起こさぬようにそっと彼女を抱き上げる。

部屋に送り届けてから、父の元へテスト用紙を持って行こう。

「…」

腕の中で寝息を立てる少女は弟たちの誰よりも、軽かった。

捕まえていなければするりと消えてしまいそうだ。

「…軽いな」

彼女が自分の”妹”になってくれることは、きっと恐らくない。

妹になってほしいと願うのは我が儘だろう。

それでもどうしても、愛着というのは湧いてしまうもので…。

いつかくる別れを、今だけは考えないようにした。

続く

太陽の笑顔

それから一週間後、怪我も回復したしずくは、そろそろ発つと言い出した。

松陽も松光も心配したが、彼女が言うのだから仕方ない。

久しぶりに雨がやんだ日の朝、しずくは出発することになった。

「おまえ、兄貴の妹にならないんだな。てっきり家族になるのかと思った」

見送りに出ていた銀時がぽつりと言った。

「先生の娘と松光の妹になるのはいいけど、実質ギンジの妹になるのは嫌」

「なぁっ！　だからギンジじゃなくて銀時だって言ってんだろ！」

「いいじゃない流加だってそう呼んでたでしょ」

「流加が間違ってんだ！　俺は銀時！」

「はいはいギンジ」

どこまでも間違えるしずくに、銀時はムキーと歯を見せる。

ふんだとそっぽを向いたしずくの頭に、松陽が手を置いた。

「お気をつけて。元気でいて下さいね」

「はい。先生には本当にお世話になりました」

「オイ！　俺たちのこと忘れてるだろ！」

ムッと唇を尖らせる晋助と小太郎に、しずくはふんっと鼻を鳴らした。

「アラいたの。小さくて見えなかったわチビ助くん」

「なっ…！」

「貴方も少しは男の子らしくなったら？　ヅラちゃん」

「ちゃ…！　ヅラじゃない桂だ！　それからちゃん付けするな！」

キーッと牙を向いてしずくに飛びかかりそうな二人の首根っこを掴み、まあまあと宥める松光。

「でも…」

そっぽを向いたまま、しずくがぽつりと呟く。

「…ありがとう」

途端に大人しくなった二人が、照れたように鼻や頬をかき「おう…」と返事をする。

「また来いよな」

「うん」

銀時の呼びかけに素直に頷いたしずくは、松光の着物を引っ張って「行こう」と促した。

「なんだよ、兄貴が送るのか？」

「森の外までな。何かあったら危ないから」

「大丈夫って言ってんのに」

ずばり言われ、そう言うなよと松光は苦笑する。

「それでは、お元気で」

「じゃあな」

「元気でな」

「手紙寄越せよ」

松光以外の男性陣に言われ、「うん」と頷いたしずくは、

さようならと手を振って、付き添いの松光と共に去っていった。

その姿が見えなくなってから、銀時がぽつりと言う。

「あいつ、家族にならなかったな。先生」

「しずくにはしずくの人生がありますから。彼女はどこかで、彼女のやらなければならないことをやり遂げてくれますよ」

松陽もいささか残念そうだったが、それでも笑顔でそう言った。

晋助が小さくぷぷっと笑う。

「しかし、銀時に対してのホコリは良かったよな」

「なんだよ！　お前だってチビ助とか言われてたくせに！」

「あー！　そんなこと言ったらヅラちゃんのほうが的を射てるだろ

うが！」

「ヅラって言うな！」

ギャイギャイと口論を始めた息子たちに苦笑して、松陽はしずくと息子が消えた方向を見やる。

しずく、とうとう貴女の本当の名前を知ることは出来なかったけれど…。

どうか貴女が、幸せになれますように…。

「見事に晴れたなぁ」

空を見上げながら、松光はぽつりと一人ごちる。

しずくが来てから一度として晴れることのなかった空は、今日は憎らしいほど青かった。

「そう言えば結局、お前が男嫌いな理由を聞かなかったな」

森の中をサクサク進みながらぽつりと言えば、隣をぽてぽて進むしずくは、居心地悪そうにうつむいてしまった。

それを確認して松光は袖から両腕を抜き、懐にしまい込む。

「まあ無理強いはしないがよ。ただ、世の中お前を男嫌いにさせた男だらけとは思わないでくれ。確かに俺みたいなロクデナシは沢山いるが、親父や弟達(あいつら)みたいなイイヤツもいるから」

そう言ったら、しずくが何事かを呟き…。

「ん？」

聞こえなかったのだろう。

松光が間抜けな声を上げ、しずくは何でもないと首を振る。

「松光はロクデナシじゃないよ…」

彼女が呟いたこの言葉を聞くことが出来たら、松光はどれほど喜んだろうか…。

「…松光」

「んー？」

「私、強くなりたい。強くなって、みんなを護りたい」

落ち葉の絨毯を踏みしめながらふわふわと揺れる金髪を見下ろし、松光はそうかと頷いた。

「お前なら、出来るよ」

「うん」

そのまま森の出口まで、二人とも何も言わなかった。

言葉を探して、

それでもこの沈黙が愛おしくて、

ただ無言で、歩を進めていた。

「…あ」

そうしているうちに、森の出口が見えてきた。

出口からは、松光たちが住んでいる村とは比べ物にならないくらい栄えていそうな街が見える。

あの街に、しずくが目指す場所はある。

「俺はここまでだ。お前の目的地はデカい場所だからすぐに分かるって。服部って人に会ったらよろしく伝えておいてくれって、親父が言ってた」

「知り合いなの？」

「さあ…？」

松光は首を傾げて、

しずくは分かったと頷いた。

「じゃあ、行くね。助けてくれてありがとう」

「ああ、気をつけてな」

「うん」

しずくが背を向けて歩き出して、松光は名残惜しそうにその背中を眺めてから踵を返した。

帰るかと懐にしまいこんでいた腕を袖から出して、森に入りかけた時…。

「松光！」

ぐいと手を掴まれた。

驚いて見下ろせば、息を切らせたしずくが手を握ってくれていて…。

小さくて細い手は、とても柔らかくて温かかった。

「どうした、しず…」

「時雨！」

いきなり叫んだ彼女に目を丸くし、松光はぽかんと口を開けた。

彼女はなんと言った？

時雨？

「私の名前、出浦時雨！」

ああ…。

彼女が、名前を教えてくれた…。

最後まで知ることのないと思っていた彼女の名前。

嬉しくて嬉しくて、教えて貰ったばかりの名前を口にする。

「時雨…。いい名前だな」

しずく…、いや、時雨がにこりと微笑んだ。

出会って以来初めて見せてくれる心からの笑みは、とても眩しくて可愛らしかった。

「さよなら、松光」

「さよなら時雨。またな」

うんと頷いた時雨が、くるりと踵を返して駆け出した。

振り向くことなく、街へ駆けていく時雨を…。

松光はその姿が見えなくなるまで見送っていた。

「時雨…か」

また会えるかい？　時雨。

また会えたその時には、

お前が、太陽のように笑えていますように…。

。

「あの〜…」

申し訳なさそうな声で、松光はハッと我に返った。

どうやら長い間ぼうっとして昔を思い出していたらしい。

階段の下に、人一人分の気配が会った。

「万事屋銀ちゃんにお住まいの方ですか？」

「えっ？　ええ、そうですが…」

「良かった。これ、京から郵便です」

ずいと差し出されたのは、一枚の手紙。

配達員なのだろう。松光は礼を言って手を伸ばしたものの、あることに気づいて手を止める。

「おや、いつの間にか雨がやんでいる…」

「ええ、ついさっきやんだんですよ。お陰でこっちは助かります」

帽子を弄る配達員にお疲れ様ですと笑みを見せ、手紙を受け取ろうとしたものの…。

「京から、と仰いましたか？」

「はい。差出人は…えーっと…」

手紙を覗き込み、配達人は差出人の名前を教えてくれた。

松光の顔がぱっと輝いたのを、配達人は見なかった。

「銀時、銀時！」

ドタバタと騒がしい音がして、ソファーで寝ていた銀時は目を開けた。

何だよ騒がしいと愚痴る前に、兄がソファーの背もたれの向こうから嬉しそうな顔を覗かせる。

「ホラ、京に遠征中の恋歌殿から手紙が届いたよ。早く読んでくれ」

「んぁ～…。どうせジャンプ送れとかじゃないの…？」

「近状報告とかあるだろうが。寝ぼけてないで早く読んでくれ」

へ～いと間抜けな声を出して起き上がり、銀時はいかにも眠そうな顔で手紙を開封する。

拝啓、万事屋一同様…と読み上げてくれる銀時の声を聞きながら、松光は先ほどまで思い出していた少女を思い返した。

時雨はいまどうしているだろう。

笑えているのだろうか、不自由していないだろうか。

もし許されるなら、また会いたいものだ。

時雨。

名乗らぬお前を「しずく」と呼んだのは、雨の雫(しずく)がお前を叩いていたから。

涙の雫がお前の瞳から溢れていたから。

今はどうしているか分からない時雨。

せめてお前の頬に、悲しみのしずくが光っていませんように。

終

後・書・き

いかがでしたでしょうか、梨栖さんとのコラボ話（とか言って私が勝手に書いたお話）でした。

もう時雨にウチの子たちと会って欲しくてたまらなくて、梨栖さんの長女須藤恋歌さんの誕生日にかこつけて、押し付けがましく書いてしまったけれど…。

いやはやもう楽しかった！　時雨の毒舌にいちいち凹む松光が楽しかった！　もう書きたいこと沢山詰め込んで、ちょっと燃え尽きた玖月…（嘘です。燃えてますが尽きてはいません）

ちなみにタイトルの「雨の中の光」意味は、お母さんを亡くして泣いていた時雨に、松光がほんの少しでも生く先の光を照らしてあげられたらなという願望だだ漏れな由来と、時「雨」と松「光」という見た目通りな意味がありました。

ほんの少しでも楽しんでいただけたら幸いです。ま、一番楽しんだのは私なんでしょうけどね！　エヘ。（＾－＾）／☆

時雨！　松光と会ってくれてありがとう！

読者の皆様、最後まで読んで下さりありがとうございます！

そして梨栖さん！　書き進める許可を下さって本当にありがとうご

ざいました！　ぜひまたコラボ話、宜しくお願いいたします！（最後までがめつい玖月でした）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5260z/

雨の中の光

2011年12月20日01時48分発行